

新作玩具体験会3―前編―サンプル

大学三年の夏休み。といっても社会人である宗形に夏休みなんてものはなく。けれど約束を守るため、宗形は特別に休暇を取ってくれた。

「……またカレンダーを」

宗形が苦笑する。でも楽しみなのだ。だからついカレンダーを眺めてしまう。

宗形の休暇は来週の土曜日からの九連休。嬉しくて嬉しくて、寝室のカレンダーに花丸を付けておいたらすぐにバレて笑われて。でもこんなに長く一緒に過ごせるのは初めてのことなのだ。

「何がしたい？」

ホテルも取れるよ、と宗形は言ってくれていた。でもまだ夢見心地で、それに遠出をしたら移動時間ももたないような気がしてしまつて。

（運転してる顔も好きなんだけど……）

でもやっぱり触れていたい。裸も見ていてほしいし。それに――。

「えつと……あの……星、が……」

以前連れて行ってもらったプラネタリウム。ふかふかのベッドに寝転んで、他の人もいるというのに何度もイった。そのときに想像した自然の中でのことがどうしても忘れられなくて。

「星？ ああ、じゃあ山に行こうか。せっかくだからキャンプでもして」

「え……つと、あの……あ、キャンプ場の予約、もう難しいんじゃないですか？」

こんな直前ではきつともう予約はいっぱいになってしまっているだろう。なんせ夏休みなのだ。

宗形は少しだけ考えるような素振りを見せたけれど、そのままふつと口角を上げた。

「他の客がいるところでは嫌、ということだね」

「や、そんなつ、別にそんなんじや……だってもう直前ですから」

必死な言い訳だ。でも、もう裸で星を見ていたいというのも話してあったし宗形自身も星を見ながらセックスがしたいと言ってくれていたのだ。だから言い訳なんて必要ないのだけれど、やはり直接的な言葉でねだるのは恥ずかしい。

「分かつてる。冗談だよ。慶くんが裸で過ごせるようなところを用意するから安心しなさい」

「えつ……あ……」

お願いします、と言つていいのか。それとももう少し「違う」と粘るべきなのか。

「場所には私に任せなさい。慶くんは……そうだな、外で過ごすための練習をしておこうか」

「え……？」

宗形がベッドから降りてクローゼットを開けた。そして取り出されたのは犬の絵が

描かれたペットシート。

「あ……え？」

以前にも使ったことがある。一日ベッドから降りてはいけないと言われ、食事も食べさせてもらいながら長時間のエネマグラに耐え抜いたときだ。そのとき排泄用に腰に敷かれていたものがこれ。

「今日はベッドではないよ。慶くんはキャンプで地面に排泄することになるから、今のうちに床にしゃがんで出せるようにしておこう」

「え……」

もしかして宗形はプラネタリウムで想像していたことを知っているのだろうか。

野外でのプレイを考えれば考えるほど興奮した。でも一番興奮したのは野外でのミルキングだ。まるで動物のように扱われることを想像して高まってしまった。

いや、でもせっかくなら動物の赤ちゃんがいい。まだミルクが必要なほどの赤ちゃん。普段は人間に育てられているけれど、たまには自然が大事だからと遠足のように連れて来られた設定で。

普段はオムツをしていても、外だからと垂れ流しになるかもしれない。でも赤ちゃんだから恥ずかしくないのだ。むしろ邪魔なオムツがなくて嬉しくて、花を見たり虫を見たり。川の水に触れて驚いて、それを飼育してくれている宗形に慰めてもらうのだ。

でも一通り遊んだらお腹が空いて、見守ってくれていた宗形の元に戻ってミルクを飲ませてもらう。そしてそのまま眠くなってしまって、哺乳瓶の乳首を咥えたまま眠ってしまう——でもそのペニスには、金属の貞操帯。

いや、まさか心の内をそこまで読んでしまうということはないだろう。これは単に、宗形の趣味——のはずだ。

そう思ったのに、続いて出た言葉に焦る。

「哺乳瓶と……あとは何が必要かな」

「あ……の……何、を……？」

宗形に言った覚えはない。でも、そこまで言われると知られてしまっているようにも聞こえる。

「ん？ 外で、裸のまま解放感の中遊びたいんじゃないかと。前にそう言っていただろう？」

「え？」

思っではいたけれど、言った覚えはなかった。

「忘れたのか？ ああ忘れたと言うより朦朧としてたからな」

「え、え？」

最近風邪をひいた覚えはない。至って健康で、朦朧としたことなんて。

「少し前にセックスしたときだよ。イきたいって泣いたとき。覚えてないかな」

「あっ……え、あのとき……？」

宗形の言う通り、イきたいのにイけなくてぐずぐずになったことはあった。ペニスがつかなくてつかなくて——そうだ、あれは確か講義中に友達から飲みからの誘いを耳打ちされて、男を近くに寄せたお仕置きとしてミルクキングさえしてもらえなかったセックスだ。

「そう。おちんちんが痛いって泣いていたね」

「っ……」

全身がカアツと熱くなる。

「とても可愛かった。そういえば、もう痛くはないね？」

「っ……や……」

宗形はずっと優しいばかりだったはずなのに、指輪をもらってからはこうして少し意地悪なことを言うようになった。それに以前は友達付き合ってたって大事だと言ってくれていたのに——いや、今も友達は大事だと言いながらも、マイクを通じてちょっとした距離が近いと感じるとお仕置きをされてしまう。

「ほら、慶人くん」

「っ……いた、い……痛い、です……」

もう一生外れることのない貞操帯。その中に閉じ込められたペニスは当然もう完全に勃起することはできない。

「可哀想に。でも時間が経てば痛くなくなるから」

「は、い……」

それはつまり、勃起自体しなくなるということだ。

「おいで」

宗形は優しい。ペニスが窮屈そうにしていると慰めるように抱きしめてくれるのだ。余計にドキドキしてしまつて痛みが増すことも多いのだけれど、それでも抱きしめてもらえる喜びの方が大きくてつい腕の中に入ってしまう。

「うう……」

「痛いね……可哀想だ」

「ん……痛い……」

やはり宗形に抱かれたことで痛みが増した。

「……少し見せてごらん」

家での全裸生活も相変わらず。宗形が覗き込みようとしてきたので、羞恥を押し殺しながらベッドの上で足を開く。

「ああ……本当に痛そうだ。ミルクキングをしようか」

「え……いいんですか？」

週に一度だったミルクキングは、今では二週に一度になっている。このまま頻度を減らしていつか、最終的に勃起も射精もできなくさせると聞いていたけれど。

「ああ、たまには甘やかしてあげないと」

ミルキングはとにかくつらい。そう思っていたはずなのに、今はミルキングがなければ生活できないまでになってしまった。だってもう射精はできないから。それなら吐き出すためには搾ってもらう他ないのだ。

「お願いします……」

四つん這いになり腰を上げる。いつまで経っても慣れることがない代わりに、羞恥による快感がなくなることもない。

「……敬語がまだ抜けないね」

「あつ……」

撫でられたお尻。手付きは優しいのに声は少しだけ鋭くて、またお仕置きされてしまうのかもしれないと胸が高鳴る。

「ご、ごめん……？」

でも年上の宗形への謝罪に「ごめん」なんて失礼な気がして言にくい。

「うん、それでいい。私たちは恋人なんだから。むしろこんなおじさんと『付き合ってくれている』くらいいなかから気にすることはないよ」

「やつ！ そんな風に言わないでください」

つい敬語で言ってしまった。けれど、そんなことよりも早くきっぱり否定したかった。

「やだ、やです……」

「ああ……うん、悪かった」

「あつ……」

お尻に触れた柔らかい感触。そんなところにキスするなんて。

「口がいい……」

「ミルキングが終わったらたくさんしよう」

どうやら本当にミルキングをしてくれるらしい。すごく助かる。

「いっぱい搾って……」

肘を折って頭を下げ、更にアナルを強調する。

「お尻……」

「ああ」

宗形が動いた。ヘッドボードからコンドームが取り出され、一度伸ばしてから小さな貞操帯の上に被せられる。

これは最近されるようになったことだ。どれほど出ているのかを確認するために、受け皿の代わりに使われている。

（もったいないのに……）

使い捨てのコンドームをこんな風に使うのはもったいないと思う。けれど使ったとしても普段は二週に一度だし……と思うとそれほどでもない使い方ではないようにも思える。それでもやはり、結局ただ捨てるだけの精液を入れていると思うともったいない。

まあ、どう思おうと宗形には理解されないのだろうけれど。

「入れるよ」

「ん……」

ミルキングに特化した専用の玩具がアナルに挿入され、そして精囊の部分をぐーつと押される。軽い圧迫感。

「ああ……」

この身体もミルキングにはもう慣れた。押されて十秒もすればたらー……と液体が垂れていく。

「お尻、ひくひくしてるよ」

「ん……お尻広げられるの好き……」

「広げられるってほどの太さはないよ」

宗形がくすくすと笑った。でもどれほど細くても、無理矢理外から広げられればそれだけで気持ちいいのだ。

「じゃあ太いの……」

「それはおねだりかな？」

他愛のない言葉遊び。でも半分は本音だった。ミルキングで怠くなった身体を抱いてほしい。

（……変なの……）

自分でもおかしいと思う。普通なら元気なときにたくさん気持ち良くなりたと思うはずだ。なのに最近、なぜ身体が怠いときに抱かれないと思ってしまう。

「ん……抱いて」

「ミルキングで疲れるだろう」

「いいから……」

「ダメだよ」

どうしてダメなのだろう。いや、その気遣いは普通なのかもしれないけれど、本当に抱かれない。ダメだと言われると、余計に。

「大丈夫だから……っていうか……」

「うん？」

「その……疲れて動けないときにしてほしくて……」

「それは……ちよつと詳しく聞かせてほしいな」

ミルキング用の棒が抜かれた。もう終わったのかとコンドームを見ると、そこに液体はほとんど入っていなかった。

「ごらん。減ってきただろう」

「はい……僕もう精液作らなくなってる……」

「ああ。そうだよ。いやらしいね。大事なおちんちん、こんな金属の中に閉じ込められて、気持ちいいことも大好きなのに全然触れなくて、精液だけ抜かれてる」

くくく

「虫に刺されていないか確認するから寝転んでごらん」

早速テントの寝心地を知る。石や枝もなかったから痛みはない。でもやはり地面の上ということで、硬い。

「……うん、胸やお腹は刺されていないね。うつ伏せに」

ころんと寝返りを打って背中を曝す。そしてこちらもどうやら大丈夫だったらしい。

「お尻も見ようか」

「あ……」

恥ずかしい。それにお尻なんて——アナルなんて肉で隠されて見えないのに。だからそんなところ、虫に刺されるはずがないのに。

「はい……見て……」

でも、見てほしかった。虫刺されなんてないと分かりながら。

四つん這いになってお尻を上げる。恥ずかしい。ぶら下がる陰囊までも丸見えだ。

「……これではよく見えないな。大事なところを刺されていたら困るから、きちんと見えるようにしなさい」

「っ……はい……」

はつきりと言葉にされなくても分かる。だから、素直に両手をお尻に回して肉を開く。

(うう……)

頭で上体を支えると少し痛い。やはり地面が硬いのだ。でも、ちゃんと見てほしい。

「ああ……ひくひくしているよ。痒いのかな。それにアナルが真っ赤だ。刺されていないといいんだが」

「あっ！」

宗形の指がアナルに触れた。どうやら見られたい願望が強すぎて……いや、アナルが緩すぎるのだろうか、そこは少し開いてしまっていたようだった。

指がアナルの縁に触れる。それ以上されたら入ってしまう。ダメなのに。まだ洗浄もしていないし、ここはテントなのに。山の中の、小さなテント。その中で自分一人裸になってアナルを自分で捻げている。

「ん？ 痒いか？」

「や……痒くないです……刺されてないから」

「ああそうか。アナルが真っ赤なのは前からだったね。刺されていないくてよかった。でもここにもちゃんと虫よけをスプレーしておかないとな」

背後でキャップを開く音が聞こえた。どうやら宗形は虫よけスプレーを持ち歩いているようだった。

そしてシュッと軽い音がしてアナルが濡れた。

「これでいい。大事なところだからきちんと守ってやらないとね」

「はい……ありがとうございます」

それなら陰囊やペニスにもしてほしい。どちらもそれぞれきちんと手で持って、大事に、丁寧に振りかけてほしい。さっきみたいに流れで振りかけるだけではなくて。

「……あの、総一郎さん」

「ん？」

もうスプレーも虫刺されチェックも終わったはずなのに、手を離していいという言葉がもらえない。恥ずかしいのにずっとアナルを曝したままだ。

「……陰囊とおちんちんにもスプレーしてほしい……」

「ああ、そうだね。でもおちんちは刺されてもいいんじゃないかな」

「えっ……やだ、やだっ！ やです、おちんちん痒いのやだ！」

それでなくても触れないのに。もしこんな状態で刺されたら発狂してしまう。

「大丈夫、もしおちんちんが刺されてしまっても虫刺されの薬があるから。私が慶人くんの虫刺されを一つだって見逃すはずがないだろう？」

「……うう……」

言い切られると弱い。それに宗形の言う通りだから。宗形は慶人の体調不良も些細な怪我也、ささくれだっって見逃さない。

「さあ、もういいよ。次は足を確認しよう」

もうアナルを見てももう時間が終わってしまった。首は痛いし、さっきはまだ終わらないのかと思ったけれど、こうして終わりとと言われるのもっと見ていてほしいと思ってしまう。でもせっかくキャンプに連れて来てもらったのだから、いつまでもテントの中にいてはもったいない。

「……うん、足も大丈夫そうだ。足の裏にも怪我はないね」

外に行っていいよと言われたので、宗形と共に外に出る。もっといやらしいことをさせられたかったという気持ちと、せっかくなのだから外を満喫したいという気持ち。どちらも強くて苦しいほどだけれど、時間はまだたっぷりあるのだと自分に言い聞かせ、近くの小川にそっと手を入れてみる。幅一メートル、水深十センチちよつとくらの小さな子供でも遊べそうな川。

「わっ」

思っていたより冷たかった。でもこの気温は自宅よりだいぶ低いし、木陰がしつかりとできているので水温も上がりにくいのかもしれない。

「冷たい？」

「うん、すごく」

でも慣れれば気持ちいい。日陰では冷えそうだけれど、日差しの当たる場所であればちょうど良さそうだ。

「水遊びしていい？」

「もちろん。好きに遊んでおいで」

「総一郎さんは？」

「慶人さんのトイレの用意をしておくよ。身体が冷えないように、寒いと感じる前にやめるんだよ」

まるで子供の扱いだった。でもこんな風にはしゃいでいればそうなくても仕方がないか。

でもそれよりも気になる発言。トイレの用意、とはどういうことなのだろうか。

「あの、トイレって？」

「ああ、私はロッジのトイレを使うが、慶人くんは外で排泄するんだよ」

「え？」

「せっかく外で裸で過ごすんだから自由にしてほしい。と言ってもどこでも排泄していいというわけにはいかないから、用意ができたらちゃんとトイレの場所を舐けるよ」

「……はい……」

トイレの舐——ペニスが反応しそうになるのを隠すためにくりと背を向け小川に戻った。そして日の当たるところに座って足先を水に浸ける。

（痛い……）

ペニスが痛い。これからしばらくの間本当にここで裸のまま過ごすのだと思うと、そして排泄も外でするのだと思うとどうしたって興奮してしまう。

（うう……痛い……）

水は冷たいし、貞操帯に当たってペニスは痛む。それなのに一向に萎える気配がない。

（どうしよ……）

ちらりと背後を振り向くと、宗形がテントの近くでこちらに背を向けしゃがみこんでいた。きっとあそこが慶人のトイレなのだろう。テントの近く。きっと夜中、排泄がしたくなって一人で外に出たら宗形の眠るテントの方を見ながら用を足すことになるのだ。

（痛いっ……痛い……）

下を見ると、窮屈そうに身体を歪めたペニスがかった。色も真っ赤で苦しそう。でも馬鹿だな、と思う。もうこの貞操帯が外れることは二度とないのに諦めることを知らない。いや、まだその現実を受け入れられていないのだ。

（もう無理なのに……）

下を向くだけで目に入る貞操帯の鍵穴。そこには折れた鍵が見えている。

（取れないのに……）

鍵穴は塞がっているし、外してくれるという業者のところに繋がるカードも破り捨ててしまった。それにそもそもそこに行く——つまり、宗形との離別を選ぶという考えは微塵もない。だからあとはペニスが勃起を諦めてくれるのを待つしかないのだ。それなのに、このペニスはいつまで経っても起とうとする。痛くなると分かっているが何度でも硬くなろうとするのだ。

「あ……」

それでも時間が経ったからか、ペニスが少しずつ萎え始めた。痛みと圧迫感がなくなりほっとする。

「慶人くん」

「あ」

振り返ると宗形がこちらに向かっておいでと手を振っていた。急いで立ち上がり、急ぎ足でそこに向かう。

「慶人くんのトイレの用意ができたよ」

指し示された地面。そこにあったのは簡易的なトイレだった。いや、簡易的なトイレと言うのも憚られるようなもの。木の葉を避けて作られた空間に、軽く埋められた大きめの空き缶。恐らく昨日宗形が食べさせてくれたパイナップルの缶詰だろう。そこに透明のビニール袋が被せられているだけのものだった。

「小さいから最初は難しいかもしれないが、慣れればちゃんと溢さずに排泄できるようになる。最初は私が見ておくから安心なさい」

「あ……」

見ておく、というのはきっと排便のことだろう。排尿に関しては幸いと言っていいのか、貞操帯があるので狙いが定まらないということはない。皮が剥けないので四方に尿が飛び散ってしまうという問題はあるけれど、缶の中にペニスを挿入するようにして排泄すれば惨事にはならない。

だから、やはり排便のことだ。アナルの位置は自分では見られないので、きっと宗形が位置の調整をしてくれるのだ。

「ビニールは透明だから、私が見ていないときに排泄してもちゃんとチェックできる。だから一人でできるようにしたら自由に排泄してかまわないよ」

優しい顔でそう言われるとつい流されそうになってしまふけれど、万が一自分でここに排泄ができるようになったとしても、お尻を拭いてもらわなければならないのだ。それに袋だって替えてもらう必要がある。だから結局隠れてこっそり、なんて排泄はできそうにない。

「さあ、慶人くん、排泄はどうか。おしっこでもうんちでも出したくないか」

「……おしっこ……なら……」

排便はまだ無理そうだけれど、排尿ならしておきたい。ここに来るまでの車内でもたくさん飲み物を飲んでしまっていた。

「じゃあ、おちんちんを入れてもらえ」

「はい……」

その場で四つん這いになり、少しずつ近付く。そして穴の上で腰を下ろし、貞操帯が缶に入るように――。

「もう少し前だよ」

「っ……」

後ろから覗き込まれながらの排泄位置のチェック。恥ずかしい。こんな排泄、過去一度もしたことがない。

「そう、そこでいい。もう少し腰を下ろしてもいいな……皮でおしっこが飛んでしまおうだろう」

「あっ……」

ビクンとベニスが揺れた。これ以上反応したら排尿ができなくなってしまった。宗形にもその様子は見えているだろうに、そんなこともおかまいなしに進められる。

「さあ、おしっこを出してごらん」

場所を教え込むように、宗形の手が腰を下に押した。

「ん……」

「ゆっくりでいい。外の景色を楽しみながら出しなさい」

「あっ……」

思わず視線を上げてしまった。目の前に広がる木や聞こえてくる風の音が、ここが外だと訴えかけてくる。

「あ……ぼくっ……」

「ああ、慶人くんはお外で裸になって、四つん這いで空き缶に排泄しようとしているんだよ」

「あっ……あっ」

ダメ、勃起してしまう。

「ダメ……総一郎さん……」

「うん？」

「っ！」

宗形の手が陰囊に触れた。そしてまるで暖簾をくぐるかのように陰囊をどかした。

「ああ、勃起しそうだね」

まただ。また後ろから覗き込まれてしまった。

「トイレは川のそばにしよう。一度身体をどけてくれるかな」

「あ……」

失敗してしまった。排尿するように言われたのにできなかった。それに、理由は分からないけど場所まで変えさせてしまう。せっかく設置してくれたのに。

「や、ごめんなさい、総一郎さん、出すから、おしっこ、出すからっ」

「慶人くん、また敬語になってる。まあすぐには難しいかもしれないが、ここにいる間に直してほしいな」

声の調子からみても怒っているようにには見えない。でも腰に乘せられていた手はお尻に移動し、身体をどかすように急かしてくる。

「さあ、移動だ。こちらにおいで」

土に埋まっていた缶が引き抜かれ、そのまま宗形が持つて行ってしまう。どうやら本当に川のそばにするらしい。急いで立ち上がり背中を追う。

「ここでもいいかな」

川から一メートルほどの木陰。そこに穴を掘り、缶が再び埋められる。

「どうしてここにしたか分かるかな」

分からなくて首を傾げる。しかし宗形は缶を埋めているので気付かなかったらしい。

「慶人くん？」

「わかり……わかんない」

「そうか。ここにしたのはね、慶人くんがとてもえっちなで、すぐにおちんちんを勃起させてしまうからだよ」

「や……何、何言ってる……」

「そうだろう？　せっかく貞操帯もついているのにおしっこするだけで勃起しようとして。でもほら、ここなら水がすぐ近くだから水に浸けておちんちんを萎えさせられるだろう」

「あ……や、やだ、そんな……」

あの冷たい水にペニスを浸けるなんて。でも、確かにそうすれば萎えさせることはできそうだ。

「さあ、できたよ」

宗形が缶から手を離れた。先程と同じように埋められている。

「……ああ、まだ勃起したままだね。さあ、川でおちんちんを冷やそう」

「や、やだ、怖いっ」

だって痛いに決まっている。さっき水に触れたとき、かなり冷たく感じられたのだ。

手足で冷たく感じる温度にペニスを浸けるなんてできない。

「大丈夫、ほら、日向だから」

確かにすぐ近くの部分は日向だ。けれど水なんて流れているのだから水温が高いわけがない。

「慶人くん、おいで」

土いじりをした手を宗形が洗っている。でもスコップを使っていたのでそれほど汚れてはいないようだ。洗い終えた手をこちらに伸ばしてくる。

「手を繋いでいよう」

それなら、と思ってしまった自分が憎い。でも取ってしまった手を今更ほどこともできなくて、足を半歩前に進める。

「いいこだ。さあ、四つん這いになっ」

排泄だけでなくここでもまた四つん這いなのか。でもそんなにたくさん水に浸けたら本当に身体が冷えてしまう。

「や、あの、総一郎さんがおちんちんに水を掛けて……」

それならダメージはぐっと少なくなる。濡れるのも冷えるのもペニスだけで済むし、宗形自身の手でもらえるというだけで精神的にもほっとできる。

「分かった。でもおしっこが終わった後は毎回自分でおちんちんを水に浸けて綺麗に

するんだよ」

「え……」

「うんちは拭くが、おしっこはそうして洗いなさい」

「……分かりました」

そのうち本当に一人で排泄しなければなくなる。でもそのときだってきつと自然の中で空き缶に排泄するという事態に興奮してしまうだろうし、幸い川にペニスを浸けることなく排尿できたとしても、洗うために川に浸けた時点できつと興奮してしまっただろう。そして冷たさでそのときは勃起できなかったとしても、宗形に「おしっこしたのでビニールを替えて」と言うときはきつとまた勃起させてしまっていることだろうと思う。

「さあ、おいで」

「はい……」

川のすぐ近くで膝を広げて腰を突き出すようにしてペニスを出す。

緊張と興奮で胸が痛い。

目を瞑ってしまいたいけれど、宗形の手から視線を逸らせない。大きな手が水に入った。そして掬う――。

「あ……あ……」

怖い。だってとても冷たい水だ。それをペニスに掛けられてしまう。勃起しようと健気に頑張っているのに――。

「……顔は怯えているのに、おちんちんは大きいままだね」

「あっ……っ！」

パシャ、とペニスに水が落とされた。

「あ……ああ……」

いきなりだったことに驚き、そしてその冷たさにペニスが一気に力をなくした。

「これでいい。さあ、おしっこをしよう」

差し出された手は冷たくて、こんな冷たい水をペニスに掛けられたのだという悲しみを覚えた。でも、その中に一縷の悦びがあったことも自覚していて。

「さあ、出せるかな。あまり長く四つん這いでいると大事なところが蚊に刺されてしまいかもしれないよ」

くくく

「さあ、横になって」

「あ……」

言われるがまま寝転ぶと隣に寝転んだ宗形に背中を押された。そのまま横位になると、背後から宗形に抱きしめられた。

「このまま乳首を弄るよ。乳首に集中して気持ちよくなってごらん」

「やあ……無理い……」

それならもういつそのことやめてほしい。足りない快感を与えられ続けるよりはその方がいい。

「なら止めようか。ああ、食事を作らないとな」

「っ……や……」

止めてほしいと思ったのも本心なのに、いざ宗形に止めると言われると止めないでほしいと思ってしまう。宗形と付き合い始めてから、自分でも驚くほど我儘になった。

「うん？ 乳首をするのと、止めるのどっちが嫌？」

「……やめるの……」

小さな声だったけれど、すぐ近くにいた宗形にはちゃんと聞こえたようだった。もう何度目か分からない笑い声。

「お腹は空かない？」

「空かないっ！」

だってこんなにいやらしい気分なのだ。食欲よりも性欲。

「あ……でも総一郎さんは……？」

「私のことは気にしなくていい。食事より慶人くんの乳首に触れている方が楽しい」

「……ほんと？」

「本当だよ」

「んっ……」

それならそのまま弄っていてほしい。手が疲れてしまうまでは。

「あ……ん……」

「気持ちいいね？」

「はい……」

「声、我慢してみようか」

「ん……ふう……ふ……」

声の我慢は口を閉じればいいというものではない。快感を覚えながらも逃がすのだ。そうしないと勝手に声が出てしまうから。

「ふう……ふ……はあ……ん……」

吐息と共に快感を吐き出すように意識しながらの深呼吸。脳内では二酸化炭素と共に快感が抜け出ていくのに、実際には乳首やお腹の奥底に溜まっていく。

「ん……はあ……ふ……あん……」

乳頭の先端。そこを爪でカリカリされるとどうしても声が出る。腰も揺れて、ペニスを何かに擦りつけたくなってしまう。

「慶人くん」

「あっ……」

耳元で聞こえるセクシーな声。油断をしていると本当に心臓に悪い——かつこ良すぎて。

「は、いつ」

「もう慶人くんのおちんちは擦れないよ」

「っ……」

「物足りなさそうに腰を振っても意味はない」

「あ……あ……」

溜まっていた欲がぐつぐつと沸騰していく。

「おちんちはもう閉じ込められてしまったから、普通の男の子のように気持ち良くなることはできないよ」

「あ、あ、あっ」

ダメ。このまま言葉を聞いてしまったら沸騰した欲が溢れ出てしまう。

「ほら、揺れてる。慶人くんもちゃんと男の子だ。おちんちンを擦ると気持ちいいって、まだ覚えているね」

指の腹が乳頭の先端を撫でた瞬間、亀頭を手のひらで同じように擦られたことを思い出してしまった。

「ああっ……！！」

約5万3千文字です。

宜しくお願い致します。